

大学生の生活と意識(3)

— メディア利用とコミュニケーション —

大阪大学 辻 大介

1 目的

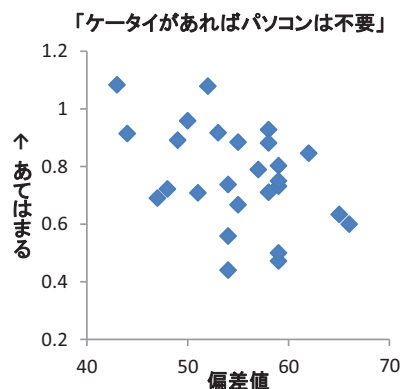
本報告は、全国 26 大学の学生調査の結果をもとに、大学間で、メディア利用とコミュニケーションの状況にどのような違い（あるいは共通性）があるかを検討する。ジェンダーや年齢、学歴等の個人属性によって、情報通信技術やメディアの利用に違いがあり、ひいてはそれのもたらす効用・利得に格差をもたらす可能性があることは、いわゆる「デジタルデバイド」論をはじめ、数多くの研究によって明らかにされているが、ここでは大学という集団単位での「デバイド」を考えたい。たとえば所属する集団（大学）において、パソコンでのネット利用があまり行われず、携帯電話でのコミュニケーションが専らであるとすれば、その環境は個人に対してパソコン利用を抑制し、携帯電話利用を促す——小林・池田(2005)のいう「携帯デバイド」を拡大する——ように作用するだろう。これは、大学の公式的な教育カリキュラム等ではなく、非公式的な集団環境に埋め込まれた、より目につにくい差と言える。このような集団環境の違いを明らかにすることが本報告の目的である。

2 分析方法

各大学を 1 ケースとし（全 26 ケース）、質問紙調査の各設問については大学ごとの回答平均値を用いて、入学難易度や所在地等の大学属性変数とクロスして分析した。なお、大学によって年齢（学年）構成に違いがあり、その影響を除くため、分析対象は 20 歳以下のサンプル（個人ベースのケース数で N=2299）に限定した。また、大学ごとに回答者の男女比も異なるため、分析は男女別に行った。

3 結果

携帯電話利用については、概して入学難易度（偏差値）の低い大学ほど、親和的な傾向が認められた。すなわち、難易度が低いほど、「ケータイがあれば、自分専用のパソコンはあまり必要ない」と考え（男女とも $r=-.43$, $p<.05$: 右図は女子学生ケースの分析結果）、「とくに用事もないのに友だちにメールを送る」（男 $r=-.50$ ・女 $r=-.46$, いずれも $p<.05$ ）、「ケータイ小説を読む」傾向が高い（男 $r=-.49$, $p<.05$ ・女 $r=-.37$, $p<.10$ ）。一方、交友関係については、難易度の低い大学ほど、親友数が多く、また、ひとつの仲間集団内に限られる傾向にある。このことと考え合わせるならば、こうした大学では、「とくに用事もない」携帯メールのやりとりが仲間内での濃密なコミュニケーション環境（架橋型 **bridging** ではなく結束型 **bonding** の関係資本）を形作っている可能性が示唆される。当日は、この他テレビやネット等の利用に関する分析結果もあわせて報告・考察する予定である。



文献

小林哲郎・池田謙一(2005)「もう一つのデバイド：「携帯デバイド」の存在とその帰結」、池田謙一編『インターネット・コミュニティと日常世界』誠信書房